○○してみました世界のフィールド

シェルパの村とトレッキング観光

古川不可知（ふるかわ ふかち）
民博 機関研究員

村の家族と筆者（2016 年）

エベレスト登山者のサポート役として有名なシェルパ族。筆者はシェルパの家族が営むロッジに「息子」として飛び込んだ。彼らと寝食をともにすることで見えてきた、現地の人びとの暮らしぶりを紹介する。

ネパールと聞いてまず思い浮かべるのは、エベレストとヒマラヤ、そしてトレッキングといったところであろう。観光シーズンにあたる春と秋の乾季になると、欧米や東アジアを中心に世界各地から登山客やトレッキング客がこの国にやってくる。彼らはガイドに連れられて山道を行き交い、ロッジに改装されたルート沿いの民家は英語の看板を掲げて観光客を迎え入れる。

トレッキングをする人びと（2016 年）

シェルパの村とロッジの仕事

わたしはエベレストの登山口まで歩いて三日ほどの位置にあるシェルパ族の村、ポルツェを拠点に調査をおこなっていた。主要なトレッキング・ルートからは少し離れたこの村は、近隣の村に比べると観光地化は進んでいないが、それでも村内には一〇軒ほどのロッジが建てられている。

わたしが居候していたのはそうしたロッジのひとつであった。ご主人が病気で亡くなってからは、奥さんと、交代で村に帰ってくる二十代の息子二人によって経営されている。全一〇室ほどの小さなロッジではあるものの、シーズン中には満室となる日もあり、夕刻には部屋の準備や食事の支度で大騒ぎである。

この家の「息子」として暮らしていたわたしも、毛布を運んだり、給仕をしたり、ときには簡単な料理をするなどして仕事を手伝っていた。ロッジを切り盛りする「母親」は、英語は片言でネパール語も読み書きができないため、特にガイドを連れない外国人グループがやって来ると注文をとりに行くようわたしに言う。シェルパと日本人は風貌や体格が似ているので、何食わぬ顔をしていれば気づかれないことも多い。「君はシェルパなの?」と聞かれたときには「日本人だけどここの息子なんだ」と答え、お客さんの怪訝（けげん）そうな顔を密かに面白がっていた。

ポルツェ村の様子（2013 年）

信頼と駆け引きのトレッキング・ビジネス

シェルパがビジネス上手だというのは、ネパールに住む他の民族の人びとがしばしばやっかみ交じりに口にするところである。もっともビジネスといっても、日本の基準からするとやり方はじつに鷹揚（おうよう）だ。料理は注文を受けてから下ごしらえを始めるので一時間近く待たせることもざらだし、お金の計算も大雑把である。というよりも、ほとんどのモノやサービスの値段は、人間関係や交渉、またときにちょっとした騙（だま）し合いによって変動する。

例えばある朝、トレッキング客の一団とそのガイドが出発の準備をしていた。わたしは明細を計算してガイドに総額を示す。そのとき客がポケットティッシュを買いたいと言うので、金額を告げて計算書に書き加えようとすると、ガイドはネパール語で「書くな書くな」と言う。彼は観光客に倍の値段を伝え、わたしにはその半分のみをこっそり手渡した。

暮らしていたロッジ（2014 年）

ネパール

すべての客が出発したあとで「母親」にこの話をすると、彼女は笑いながら言う。「ガイドは二四〇ルピーといった端数のものを客が頼むと、きりよく二五〇ルピーなどと告げて差額を『食べて』しまう」。また客からだけでなく、「ガイドによっては自分で計算書を書き、わざと注文をいくつか書き落として、（ロッジに入る食費を）着服する。あるときなんか、夕食が明細に書かれてなくて（亡くなった）主人が怒った」。だから、「プリ（わたしのシェルパ名）がいれば、ロッジの人間が注文を書けるから助かる」と言ってくれる。

こう書くとトレッキング観光は殺伐とした化かし合いのようだが、ガイドとロッジと観光客はお互いもちつもたれつの関係でうまく回ってゆく。ガイドはロッジや客から抜け目なくマージンをとろうとする一方、客をロッジに連れてくる重要な存在である。ロッジもまた少しでも多くのお金を使わせようとしつつ、なじみのガイドや気に入った客には無料の茶や食事で気前よく歓待する。観光客は何かとうるさく値切る一方で、サービスが気に入ればガイドやロッジに莫大な額のチップをはずむ。最初は彼らの「いい加減さ」に苛立っていたわたしも、いつしかシェルパの「ビジネス」を楽しむようになっていった。

夕食時の歓談（2016 年）

料理中の「母親」（2016 年）